

インクルーシブ教育って、どんな教育？

最近インクルーシブ教育という言葉をよく聞きますが、どのような教育でしょうか？



子どもは一人一人違います。得意なこと、苦手なことも違います。その違いを大切に、子ども一人一人が自分の力を発揮できるようにする教育のことです。

外国にルーツがある子ども、体の性と心の性が異なる子ども、障害のある子どもも、同じ仲間として学び合い、助け合える授業づくり、学級づくりを実現することが必要です。



特別な方法、やり方があるのですか？

特別な方法、やり方はありません。一人一人の違いを見据え、わかりやすい授業づくり、安心できる学級づくりをしていくことが大切です。学習や生活の場面で子どもたち一人一人が活動や参加ができるよう工夫しましょう。

友達の活躍やがんばりを認め合えるようになると、子ども同士助け合いながら伸びていきます。



子どもが違いを認め合い励まし合う実践の具体例を知りたいです。

<実践例 1> 発達障害の診断を受けた子どもが通常の学級に複数いる小学校

イライラしてしまいその場で固まってしまう下級生に対し、6年生はイライラが収まるまで様子を見守りながら、進んで声掛けをしている。6年生全体がそのような行動を自然に取ることができ、それが学校の伝統となっている。またこの学校では「子ども一人一人は違う」「一人一人の違いを大切にした教育」を実践している。校長は常に教職員へ『ふつう』はない。子どもへの対応は一人一人違って当然」と話している。

<実践例 2> 不登校傾向の生徒が多い中学校

4月に Microsoft Forms を使い、全生徒および保護者に特別支援教育に関するアンケートを実施し、学習や学校生活で困っていることがないかを把握している。アンケートの結果は5月の生徒指導委員会で全教職員と共有し、日々の指導に生かしている。例えば生徒が「単位の変換が苦手」と回答した場合、担任が数学担当と話し合い、単位の変換が必要な問題で当該生徒への支援を行っている。またこの学校では、5月下旬から6月上旬、アンケートを基に保護者面談を実施している。アンケートで保護者から個別の指導計画作成の依頼があった場合は、面談までに指導計画を作成し共通理解を図っている。担任が個別の指導計画の必要性を感じた場合には、面談の場で作成を提案している。このように個々の生徒に必要な指導を事前に把握することで、不登校を未然に防いでいる。

子ども一人一人が違いを認め合い、互いに助け合えるよう日々当たり前の指導や支援を行うことが求められています。

子どもが認め合い助け合えるようになるための実践の視点を教えてください。



3つのキーワード「わかる」「つなぐ」「まとめる」で説明しますね。



一つ目は「わかる」です。クラスのすべての子ども一人一人を理解することです。子どもはそれぞれ学校生活に対して自分の思いを持っています。「がんばってやってよかった」、「もうすこしだった、くやしい」といった思いを大切にしながら言葉をかけていきます。

「できていること」「がんばっていること」を先生や友達から認められると、自信をもって子どもたちは取り組みます。

二つ目は「つなぐ」です。クラスの子どもたちが互いの思いを理解し、協力し合えるよう子どもたちをつないでいきます。「自分の苦手なことを友達に手伝ってもらってできた」「課題を解くのに時間がかかる友達も最後は解けてよかった」と子どもたちが思えるよう、自分や友達のよさやがんばりを理解し、手助けすることの大切さを教えていきます。

一人一人のよさや苦手さを肯定的に理解し合うことで、子どもは友達との関係性を高めます。

三つ目は「まとめる」です。すべての子どもが安心できるクラス経営や、自分らしさを生かして参加できる授業づくりをとおして、クラスの子どもたちをまとめていきます。「みんなと一緒にできてうれしい」「自分の発言が友達に認められて、勉強がよくわかるようになった」という姿が子どもたちに見られるようにしていきます。そのためには、「学業指導」の充実が必要です。

学校生活に安心して参加できるようになると、子どもたちは互いを認め合えるようになります。

この「わかる」「つなぐ」「まとめる」は重なり合っています。この3つを意識しながら実践し、また実践を振り返る視点としてこの3つのキーワードを使うと、インクルーシブ教育が進むことでしょう。

インクルーシブ教育では「わかる」「つなぐ」「まとめる」は大切です。



<実践例> 中学校1年生の社会科地理の授業

この中学校では、特別支援教育コーディネーターを中心に、学業指導を基盤として生徒同士が互いに認め合い高め合う学級経営や授業づくりを全校で行っている[学級全体を「まとめる」指導]。また、交流及び共同学習で知的障害のある生徒が世界地図をよく見ていて、世界の国の名前を知っている実態を特別支援教育コーディネーターから聞いている[生徒を「わかる」動き]。

雨温図から国名を見つける授業では、先生が知的障害のある生徒を意図的に指名し答えさせた。また生徒同士で自分の考えを話し合わせる場面では机間指導を行い、知的障害のある生徒が多く国の名前を発言するよう励ましたり、周りの生徒にも話合いに進んで参加するよう助言した[「つなぐ」指導]。

「わかる」「つなぐ」「まとめる」実践が
インクルーシブ教育を進めます。

担任している子どもが私や友達に時々かんしゃくを起します。WISC-Vの結果から「知的遅れはないが主要指標得点間に差があり、発達に偏りがある」と言われました。偏りが治れば友達ともつながりも作れると思いますが、何から取り組めばいいのかわからず、対応に悩んでいます。



個別の検査は検査を受ける子どもの得意なところ、持てる力を知るために行います。例えば言語理解が高い子どもは一般的に言葉を使って表現したり理解したりすることが得意です。授業での発表場面や話し合い活動で活躍できると、友達とのつながりが強まり、学び合えるようになります。

発達に偏りがあるなしに関わらずかんしゃくは友達との間で起きます。「発達に偏りがあるからかんしゃくを起す」ということはありません。友達とはどんな関係でしょうか？かんしゃくが起きた時その子はどう思ったのでしょうか？周りの友達はどう思ったのでしょうか？このような点を明らかにし、子どもの思いを読み取ることがまず必要です。これが「わかる」ということです。

子ども一人一人の思いが分かったら互いの思いを「つなぎ」、かんしゃくを起こしやすい子も含めたみんなで、よりよいクラスにするためにどうすればいいか話し合おうなどしてクラスを「まとめ」ます。

「偏りを治す」発想ではなく、クラスの子ども一人一人の成長のために、教師が子どもと「どう関わっていくか」の視点が重要です。偏りがなくなれば友達とつながれるということではなく、一人一人の思いを大切にしながら子どもをつないでいくことで、それぞれの子どもの成長が期待できます。

「発達の偏りを何とかしなければ」とばかり思っていたので、子どもの思いを読み取ることの大切さに気付かませんでした。その子が私にもかんしゃくを起こしていたのも「自分の思いをわかってほしい」というメッセージだったかもしれません。



<実践例> 入学直後教室から頻繁に出て行ってしまう通常の学級に在籍している小学校1年生

就学時健康診断では特に問題は見られなかった。教室から出て行った際には、支援員が付き添い、様子を見守ったり会話をしたりして対応している。特別支援学級での学びが必要かという考えもあったが、まずは支援員と連携しながら教室を出てしまう様子を丁寧に観察し、その子の思いを聞き取ることから始めることにした。観察を続ける中で、教室を出てしまう直前には、発言し終えて満足した様子や、発言が取り上げられずがっかりした様子が見られることが分かった。学習に対する意欲があることを見取った担任は、「がんばったらハンコを押す」シートを用意し、日々のがんばりを認める取組を行った。その結果、児童はがんばりを認めてもらえることに満足し、教室から飛び出す行動が徐々に減っていった。また、ハンコを押してもらったシートを家庭で保護者に見せるようになり、保護者も「ハンコが増えるといいね」と声を掛けるなど、担任の取組に協力している。教室での成長が見られたことから、「通常の学級での学びを続けさせたい」と考えるようになった。

子どもの「思い」を知り関わることが、
インクルーシブ教育の第一歩です。

【コラム】 昭和時代にもインクルーシブ教育の実践があった!

皆さんは斎藤喜博先生をご存じですか。昭和の時代の校長先生です。斎藤先生が勤めていた島村小学校は「島小方式」で有名です。斎藤先生は島村小学校に在籍していたある児童について、次のように述べています。

私の学校に、邦子さんという女の子がいた。この子どもの知能指数は70だった。だからこの子どもは、普通なら劣等生といわれてしまう子どもだった。算数とか国語とかいう普通の教科を普通にやらせ、5段階評価をしていれば何もできない子どもだった。だがその担任の先生は、学級のふんいきを5段階評価的なものとは反対な楽しいものにし、それぞれが自分の個性を十分に発揮しながら、みんなの力で励まし合い認め合い、力を合わせ合いながら学習していくようにした。邦子さんにも、合唱とか舞踊とかで個性を発揮させ、そこで得た自信とか、張り合いとか、努力の仕方とか、力とかを、算数とか国語とかの方へ持ちこませた。すると、いままでおずかしくてならなかった算数や国語が、邦子さんにとってはおもしろいものになり、打開のできるものになった。その結果、学力も知能もあがっていき、合唱や舞踊や学習をしている邦子さんは、知能指数70の子どもとは思えないような、美しい生き生きとした顔つきをしているようになったのだ。邦子さんもおそらく、算数や国語からぶっつけられたのでは、こんな子どもにはならなかったにちがいない。

私たちは、こんなふうに、知能の素質的なものまで変えられるということに、教育の興味もあり、教師としての喜びもあり、また責任もあるのだと考えている。

(斎藤喜博 『授業入門』 国土社 p38-39 より引用)

邦子さんは勉強が苦手でしたが、担任の先生は、合唱や舞踊などで邦子さんに個性を発揮させることで邦子さんに自信を持たせました。学習場面で困難を感じていた邦子さんは、その自信をもとに、自分らしく学習に参加できるようになりました。子どもの力が発揮できるところを見取り、指導に生かしたことが邦子さんの成長を促しました。

現代は「アセスメント」と称し、個別の検査をもとに子どもの実態を把握することがあります。そのようなアセスメントが盛んに行われる一方で、その子が「自分らしさを生かして力を発揮する」実態把握は十分に行われているでしょうか。個別の検査の数値だけでは子どもの力を見取ることはできません。

また、斎藤喜博先生は子どもが自分らしく力を発揮できるよう工夫することが「教師の専門性」であると述べておられます。障害のあるなしに関わらず、子どもが自分の持てる力を発揮できるよう指導を工夫することは、インクルーシブ教育の実践そのものであり、昭和の時代から続いている当たり前の教育の姿です。



栃木県教育委員会事務局 下都賀教育事務所

〒328-8504 栃木市神田町 6-6 TEL 0282-23-3422

<発行 令和8(2026)年5月>

